

超短期海外派遣プログラム(オーストラリア・メルボルン)
報告書

2015年4月

1. 外派遣プログラムの目的(執筆担当：中島)	3
2. 参加学生紹介と研修日程(執筆担当：黒川)	3
2.1 派遣プログラムの日程	3
2.2 参加学生紹介	5
3. メルボルンの概要(執筆担当：山本，黒川)	6
3.1 基本情報	6
3.2 経済・教育	6
3.3 地理的特徴	7
4. 訪問先詳細	9
4.1 メルボルン大学	9
4.1.1 キャンパスと教育方針(執筆担当：黒川)	9
4.1.2 講義の概要(執筆担当：飯田，衣川，川淵，中島，山本，竹中，山崎，黒川)	11
4.1.3 大学の案内と見学(執筆担当：川淵，山崎)	14
4.1.4 日本語クラスへの参加(執筆担当：飯田，衣川)	18
4.1.5 学生交流(執筆担当：竹中，衣川)	19
4.2 メルボルン市街での生活	22
4.2.1 食事(執筆担当：山崎)	22
4.2.2 街の様子(執筆担当：山本)	29
4.2.3 郊外でのアクティビティ(執筆担当：川淵，竹中，黒川)	37
5. 所感	41
6. 資料	48

1. 外派遣プログラムの目的(執筆担当：中島)

グローバル理工人育成プログラムには下記に示す4つのプログラムが存在する。

[1] 国際意識醸成プログラム

国際的な視点から多面的に考えられる能力、グローバルな活躍への意欲を養う。

[2] 英語力・コミュニケーション力強化プログラム

海外の大学等で勉強するのに必要な英語力・コミュニケーション力を養う。

[3] 科学技術を用いた国際協力実践プログラム

国や文化の違いを越えて協働できる能力や複合的な課題について、制約条件を考慮しつつ本質を見極めて解決策を提示できる能力を養う。

[4] 実践型海外派遣プログラム

自らの専門性を基礎として、海外での危機管理も含めて主体的に行動できる能力を養う。

本プログラムは、グローバル理工人育成コースの4つのプログラムのうち、(4) 実践型海外派遣プログラムの一環として実施された。実践型海外派遣プログラムの狙いは、[1]～[3]のプログラム履修後に学生を海外に派遣し、現在まで育成された能力を活用し、自身の今後の研究やキャリア形成の参考となるような経験を積むことであり、本コースの集大成として位置づけられている。実践型海外派遣プログラムは、下記の3つの能力の育成を目指す。

[1] 自らの専門性を基礎として、異なる環境においても生活でき、業務をこなす力を持ち、窮地を乗り切るための判断力、危機管理能力を含めて、自らの意思で行動するための基礎的な能力を身に着けている。

[2] 異文化理解が進み、相手の考えを理解して、自分の考えを説明できるコミュニケーション能力・語学力・表現力を身に着けている。

[3] 海外の様々な場において、実践的能力と科学技術者としての倫理を身に着け、チームワークと協調性を実践し、課題発見・問題解決能力を発揮して、新興国における科学技術分野で活躍するための基礎的な能力を身に着けている。

2. 参加学生紹介と研修日程(執筆担当：黒川)

2.1 派遣プログラムの日程

派遣プログラムの日程を Table 1 に示す。

Table 1 派遣プログラム日程

日付	行動	内容	場所
3/7 (土)	成田発—シンガポール着 シンガポール発—	11:10-17:45 21:15-	成田空港—チャンギ空 港 機内泊
3/8 (日)	メルボルン着 メルボルン郊外探索 ホテルチェックイン	-7:45 13:00-23:00 フィリッ プ島 24:00 チェックイン	メルボルン空港 フィリッ プ島 Mercure Welcome Hotel
3/9 (月)	挨拶 キャンパスツアー 講義	10:30-13:00 Welcome session 11:30-12:30 Campus tour 14:15-16:15, 16:15-17:15 講義	Chem. Eng. 学生室 メルボルン大学 各講義室
3/10 (火)	案内 日本語クラス参加	11:00-12:00 Academic culture 15:15-16:45, 16:45-18:45 Advanced Japanese	セミナー ルーム 講義室
3/11 (水)	講義 実験室訪問 化学工学科ランチパーティ ー	10:00-11:00 2 グループで講義 11:15-12:00 4 つの実験室見学 Student Club (MUCESS) 主催 の BBQ に参加	各講義室 各実験室 屋外
3/12 (木)	講義 日本語クラス参加 現地学生との交流	10:00-11:00, 13:00-14:30 講義 13:00-14:30, 14:30-16:00 Advanced Japanese 19:00-21:00 現地学生と夕食	各講義室 イタリアンレストラン
3/13 (金)	講義 日本語クラブ参加 現地学生と交流	10:00-11:00 講義 13:00-14:00 Japanese Kaiwa Club に参加 19:00-22:00 居酒屋で懇談	講義室 居酒屋 八兵衛
3/14 (土)	メルボルン市内・郊外散策 現地学生と交流	各自 20:30~22:00 pub にて懇談	メルボルン市内・郊外 Pub
3/15 (日)	メルボルン市内散策 メルボルン発—シンガポー ール着	各自 16:45-21:25	メルボルン市内近郊 メルボルン空港—チャ ンギ空港

シンガポール発-	22:40	機内泊
3/16(月) 日本着	6:10	羽田空港

2.2 参加学生紹介



フィリップ島にて（左から竹中，中島，川淵，黒川，山本，衣川，山崎，飯田）

- I. 飯田 侑美 1年生 4類
 - II. 衣川 寛知 2年生 生命工学科
 - III. 川淵 愛子 3年生 経営システム工学科
 - IV. 中島 健太 3年生 化学工学科化学工学コース
 - V. 山本 晃久 3年生 制御システム工学科
 - VI. 黒川 輝 4年生 化学工学科応用化学コース
 - VII. 竹中 友浩 4年生 電気電子工学科
 - VIII. 山崎 清行 4年生 化学工学科応用化学コース
- (引率教職員)
- I. 吉川 史郎 化学工学専攻・准教授
 - II. 江頭 竜一 国際開発工学専攻・准教授
 - III. 岩澤 亮輔 評価グループ

IV. 高本 亜希子 グローバル人材育成推進支援室

3. メルボルンの概要(執筆担当：山本，黒川)

3.1 基本情報

メルボルンはオーストラリア東南部に位置するビクトリア州の州都(人口約 430 万人)で、シドニーに次ぐオーストラリア第二の都市である。同時にメルボルンは多種多様な民族の文化が共存する、オーストラリアの文化・芸術の中心都市でもある。メルボルン市内には伝統的なビクトリア調の建物と現代的なビルとが共存し、その周辺には広大な緑地が点在している。面積の 4 分の 1 を公園が占め、「ガーデン・シティ」の別称をもつ優雅で美しい街である。また、教育・医療・インフラ整備などの評価に基づいた「世界で住みやすい国ランキング 2014」で、4 年連続の 1 位の座に輝いた。今日では、人口の半分近くがオーストラリア国外で生まれたか、国外で生まれた親を持ち、230 以上の言語や方言が話されている。また、メルボルンは、世界最高クラスの芸術アートと文化遺産を有す都市である。最先端アート満載の美術館やオーストラリア最古の美術館である、ビクトリア国立美術館などがある。アートのあふれる街である。ストリートアートも有名である。



フェデレーションスクエア前のストリートアート

3.2 経済・教育

メルボルンには、企業が本当の意味で世界中と常時つながることが可能となるインフラが整備されている。その中には、夜間飛行制限のない 24 時間運用の国際空港や南半球で最大の取扱量を誇るコンテナ港もある。建設中の建物が多くあり、インフラ整備をまさにやっている最中であった。文化的多様性はメルボルンの生活を豊かにしており、さまざまなフェスティバルが繰り広げられている。たとえば、旧正月、「光のフェスティバル」と呼ば

れるヒンドゥー教のディーワリー、ベトナムの旧正月テト、ラテン・アメリカ系のフィエスタ、文化的多様性週間などが開催されている。また、オーストラリアの多くの州で「資源」が輸出額の大半を占めているが、ビクトリア州では「教育」がダントツのトップ。中でもメルボルンはパリ、ロンドン、ボストンに並び、世界でトップ4の「学生の街」と呼ばれている。また、165か国から15万人以上の留学生を迎えており、オーストラリアで学ぶ留学生のうち約3分の1が集まっている。

3.3 地理的特徴

① 気候

メルボルンの気候は年間を通じて乾燥していて降水量は東京の40%ほどである。メルボルンでははっきりとした四季があり、夏は晴天の日が多く30度を超える気温になるがカラッとしている。ただし、日が沈むと涼しくなり、一日の中での気温変化が大きい。また、冬はおだやかであるが日照時間が短く、晴れたり雨が降ったり的气まぐれな天気となっている。全体としてみれば、年間を通じて過ごしやすい気候であるといえる。

② 時差

日本とメルボルンとの時差は日本時間+1時間であるが、毎年10月最終日曜日から3月第1日曜日までは夏時間となるので、日本とメルボルンとの時差は+2時間となる。

③ 公共交通機関

トラム(路面電車)、トレイン(電車)、バスの3種類がある。いずれもMETという機関が運営しているので、同じゾーン内であればどの乗り物を使用しても料金は同じである。mykiというICカード(日本のSuica、PASUMO、ICOCAなどのようなもの)を購入し使用する。メルボルンの中心部を一周するcity circleトラムは無料で乗ることができる。ターミナル駅であるフリンダース・ストリート駅は1日約25万人が利用し、CBDとメルボルン郊外を結ぶ電車が行きかう。当駅は、オーストラリア国内初の駅として、1854年に完成した。写真のエドワード王朝風の威風堂々たる外観の建物は、メルボルンのシンボルとして、国内外から広く愛されている。



フリンダース・ストリート駅



メルボルン市内を走るトラム

4. 訪問先詳細

4.1 メルボルン大学

4.1.1 キャンパスと教育方針(執筆担当：黒川)

メルボルン大学はビクトリア州最古の大学として、シドニー大学と並び 150 年以上の歴史をもつ名門校である。オーストラリアを代表する大学連合 "Group of Eight" の 1 校で、国際的な大学連合 "Universitas 21" 研究機構のメンバーでもある。また、2009 年の世界大学ランキング "Times Higher Education-2011-12" では、世界ランキングで 37 位にランクされている。

メルボルン大学は以下に示す 8 つのキャンパスがある。

- Parkville campus
- Burnley campus
- Southbank campus
- Creswick campus
- hepparton campus
- Dookie campus
- Hawthron campus
- Werribee campus

キャンパスはそれぞれ多くの学部，専攻で成り立っており，今回我々が訪問した Parkville キャンパスはメルボルン大学の中で中心的な場所となっている。メルボルン市内から北に約 4km に位置し，トラムでおよそ 10 分ほどである。フリートラムゾーンの外に出てしまうため，歩きや自転車、スケートボードなどで通学する学生が多い。キャンパスマップの詳細は巻末の資料編に示す。Parkville キャンパスの建物は古風な建造物が多く，建物の名前は著名な人物の名前を用いていた。講義室は階段教室という意味の "Theater" という名前であり，名の通り階段状の映画館のような造りをした講義室であった。



大学の古風な建物



Theater の様子

キャンパス内は自然が非常に多く、芝生の上でランチをする学生や昼寝、読書をする学生の光景をよく目にした。キャンパス内には Union House と呼ばれるスポットがあり、レストランやカフェ、生協など数多くのお店が営業しており学生たちの憩いの場となっていた。生協では教科書や文房具の他に服やお土産グッズなどを販売していた。教科書レンタルと呼ばれるサービスを利用することができ、非常に賑わっていた。日本のように食堂で席について食べるような場所は少なく、Take out して外の芝生やベンチで食べる人が多かった。他にも様々な場所に Café や屋台が営業しており、芸術学部の学生が書いた絵画や彫刻などを販売しているところもあった。



キャンパスの芝生



Union House の外で絵画の販売

キャンパスにはプールやテニスコート、クリケット場、運動場、ビリヤード漫画コーナーなど、学生が十分にリフレッシュできる環境が整えられていた。

学生寮はキャンパス内にあり、遠くから来ている多くの学生が寮で生活するか、シェアハウスをしていた。

メルボルン大学では、2008 年からメルボルンモデルと呼ばれる独自のカリキュラムを導入している。学生は、6つの学位コースと様々な既存の課程で学部から選択でき、卒業後は就職や、より専門的なレベルの勉強のために進学することができる。学部時代は専門教育というよりも、1つの深い分野以外に包括的に様々な分野を学んでいく。専門性を求められる医学部、法学部、獣医学、ソーシャルワーカー、理学療法士、歯学、看護学、教育学、建築学などの学位は大学院で専攻をするというパッケージプログラムとなっている。学部レベルで一般的な知識を広く身につけ、更に大学院で専門性を高めるというこのカリキュラムを通じて、学生の自己啓発、リーダーシップ育成などを目指している。また、授業で身につける学力に加え、実際の社会で通用する力を養うことも目的としている。メルボルン大学教育学部では、英語を母国語としない学生向けに、グローバル人材として必修な高いレベルの英語力習得と、実践的な言語教育に欠かせない分野の勉強及びリサーチプロジ

ェクト等が学べる Master of English in a Global Context (MEGC) というコースを提供している。英語教師や専門的な英語スキルを必要とするあらゆる職種の学生が参加している。

4.1.2 講義の概要(執筆担当：飯田，衣川，川淵，中島，山本，竹中，山崎，黒川)

全体の感想

講義は1コマ約50分で，Theaterで講義が行われる。各椅子に小型のテーブルが備え付けられている。学生たちはパソコンを用い，事前に配布された講義資料にメモをとっていた。ノートや紙を用いて授業に参加している学生は非常に少なかった。多くの教師はスライドショーを用い，図や，絵を多用してわかりやすくする工夫がなされていた。

Fluid Mech – Pr. Malcolm Davidson

この授業はメルボルンで受ける授業の中で一番初めであった。基本的な流体の授業であった。流体とはなにか，車が走行しているときにどこに流線があるかなど，基本の基本から始まり，保存則なども扱った。1年生や2年生で習う流体の式を多数扱っていたため，比較的理解しやすかった。ある程度講義を行い，数問，例題を出すという授業形式で，わかりやすかった。質問のときには，学生が積極的に質問していて，日本とは違う面が見られた。



授業後に積極的に質問する学生

Engineering Materials – Dr. Elisa Lumantrna

名前の通りであれば材料工学の講義だったが，内容は完全に生化学のものだった。ただし，学期初めの講義であるため生化学から材料工学へと展開していくことが考えられる。内容は前半が神経細胞膜電位に関するゴールドマンの式について，後半がリガンド受容体とGタンパク質共役受容体についてだった。

ゴールドマンの式の説明では，KチャンネルやNaチャンネルの働きなどの生化学の知識が多少あることを前提に計算を進めていた。細胞の成長段階の違いによってGABAに対する反応が違う等，発展的な内容を扱っていた。

受容体の説明では，リガンド受容体についてはあまり触れず，Gタンパク質共役受容体について深く扱っていた。製薬研究においてGタンパク質共役受容体がターゲットにされている為と説明されたが，これは東工大の生化学の講義と共通する。Gタンパク質受容体に対応する基質ごとにサブユニットが異なり，シグナル伝達の経路が異なることなどを説

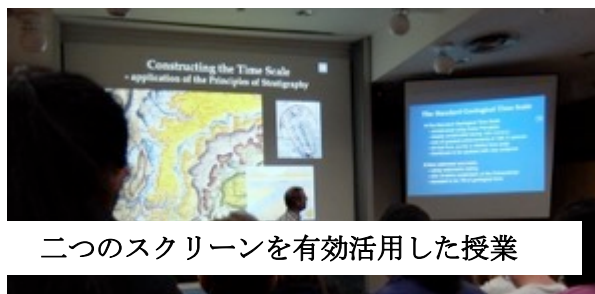
明していた。全体として東工大生命工学科 2 年までの生化学より少し深い内容が扱われていたように思える。

Engineering Communication & Practice – Pr. David Shallcross

授業が始まると橋と橋の像を反射する湖の写真を見せられ、隣の人と reflection という言葉について話し合い、全体の中でその言葉をどのように解釈したかを数人に述べさせた。その後今回のテーマは”reflection”つまり“考察”であることを述べ、Experiential Learning Cycle“経験学習のサイクル”(Act→Reflection→Conceptualize→Apply→Act→....)における reflection“考察”の役割、考察する上で何を問題として扱うか、より深く考察するために何を考えればいいかを説明した。最後に例としていくつか考察のされた文章を提示し、その文章がどれくらい深く考察されているかを 4 段階で生徒に判断させ、その判断の根拠を生徒と先生とが話し合うことで理解を深めていった。

The Global Environment - Dr. Andrew Gleadow

内容は東工大の「宇宙地球科学」に相当するもので、地球環境に関連した内容を毎回 1 テーマずつ講義するというものであった。受講時は “deep time”がテーマで、地質学的な年代の考え方や測定法についての歴史についての講義だった。相対・絶対年代、neptunism から plutonism への変遷などを学んだ。写真のように 2 つのスクリーンを用い、一方はビジュアル資料、もう一方は説明を映すという手法をとっているのが、目新しかった。



二つのスクリーンを有効活用した授業

Electrical Networks and Design - Ass. Pr.

Shanton Chang

微分方程式を用いた RLC 線形回路の解法を扱った。その際の R, L, C の各々の素子値により過渡応答がどのように変化していくかを説明していた。私は先生の英語を聞き取ることができなかったが、スライドがよくまとめられており、素子値による解の場合分けと波形の関係が一目でわかった。例題等の解説ももちろん行っていたが、講義の時間は 50 分と短く、授業を聞くだけでは理解はできても問題を解くことは難しいと感じた。東工大では電気電子工学科の授業の回路理論と“解析学”で触れる。

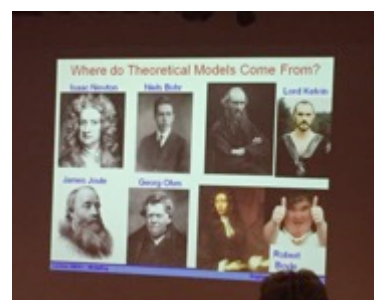
Introduction of Biomechanics – Pr. Marcus Pandey

Biomechanics とは、生体の動きを力学などの物理学を利用して解析し工学へと応用する学

問である。本講義は Biomechanics の導入として、簡単な力学の計算や、X 透過法などの体の動きをモニタリングする手法などを勉強した。力学の計算に関しては、ホワイトボードを用いて式変形を順に解説していた。モニタリング手法に関しては、パワーポイントを用い写真などでわかりやすく解説していた。また、教授の専門分野として、現在修士課程の学生によって行われている研究や、最新の 3D モニタリング手法の開発など、発展的な分野も解説された、生徒はこの分野に非常に興味を持ち、積極的に質問をしていた。

Engineering System Design 1 – Dr. Gavin Buskes

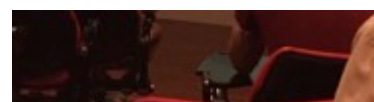
この授業ではモデリングについて扱った。先生は学生に対してクイズを出し手持ちの投票ボタンで回答するという面白い形式で授業を行っている。モデリングには大きく分けて理論的なモデルと実験的なモデルがあり、それぞれの考え方にどのような背景があるのかを解説した。理論的なモデルでは、法則に基づいて物体の動きなどを予測するが実際の挙動がそれとは異なる場合がある。その時にはどのような前提条件が隠れているか、求めているモデリングをするにはどのような情報が必要か、などについて学生に考えさせた。実験的なモデルでは、経験的な予測によってモデリングを行なうため実際に即しているが、条件変化に対応できないなどの問題について解説した。



たまにギャグを挟み、
講義は和やか

Signals & Systems – Pr. Jonathon Manton

東工大の電気系の必修で科目である、“デジタル電子回路”の講義に相当するものである。具体的には論理式 ($A+B+...=X$ など)と論理回路の図の対応、等価回路の説明(NAND⇒AND 変換)、マルチプレクサの説明とその応用に関する講義だった。また、ただ問題を解かせるだけではなく有用性(回路を構成する上でコストを削減するにはどのような部品を組み合わせたらいいのか)についても触れていた。基本的に東工大の授業と変わらないが、東工大の場合は講義の後に演習があり、時間も講義と演習をあわせて 2 時間 15 分と長い。これに対してメルボルン大学の場合は 50 分しか講義がないので予習をしっかりしないと授業についていくのは難しいと思われる。



Engineering Computation – Pr. Alistair Moffat

この講義では C 言語の導入部分について扱った。はじめに演算子の確認をし、条件によってプログラムの流れを変える if 文と switch 文の使い方と注意点について例を用いながら

解説があった。特に、間違っただけの入力を行った場合に分かりやすくエラーを出力するプログラムにすることを目的として if 文を用いることや、switch 文においてソースプログラムが正しいかどうか慎重に書き進めるよう注意があった。ケーススタディにおいて if 文の使い方について確認し、講義の最後に実際にソースプログラムを書いてみる演習の時間が設けられた。

Carbone Capture & Storage - Dr. Colin Scholes

化学工学系の院生向けの授業であり、二酸化炭素の排出・削減・貯蔵に関するものである。受講回は”Natural Gas Combined Cycle”がテーマであった。天然ガス燃焼用のコンバインドサイクルの仕組み・利点を Brayton gas turbine cycle などを交え、説明していた。私は化工の学生なので、温度-エントロピー線図などに馴染みが深かったものの、先生の英語も速く、スライドを頼りにどうにか内容を理解するという感じだった。予備知識がなければ、内容理解は少し難しかったかもしれない。説明中心の授業で、質問が出ることもほとんどなく、東工大のエネルギー操作等の授業に雰囲気は似ていた。50 人程度収容の小教室で行われたが、ここも Theatre と呼ばれる階段教室であった。

4.1.3 大学の案内と見学(執筆担当：川淵，山崎)

Welcome session (3/9)

はじめに今回の派遣学生の自己紹介を行った後、メルボルン大学についての概要の説明とオーストラリアの紹介を受けた。例えば、メルボルン大学では学部を 3 年間で卒業することや学生数について、また、オーストラリアの紹介では環境問題や輸出産業についてお話があった。

Welcome session の様子

Academic culture (3/10)

オーストラリアでよく使われる略し言葉や、教育現場における日本とオーストラリアの相違点、メルボルン大学と企業との提携について説明があった。Academic culture の中で得た知識の中で、実際にメルボルンでよく見聞きすると感じたものは、“NO WORRIES”



という言葉と教員と学生の関係性の日本との違いである。“NO WORRIES”はどういたしましてとか気にしないで、くらいの意味なであった。また、日本では学生が教員に対して馴れ馴れしい態度をとることが良いとされていないが、海外では教員の名前を呼び捨てで呼んでも失礼に当たらない。



オーストラリア文化についての説明



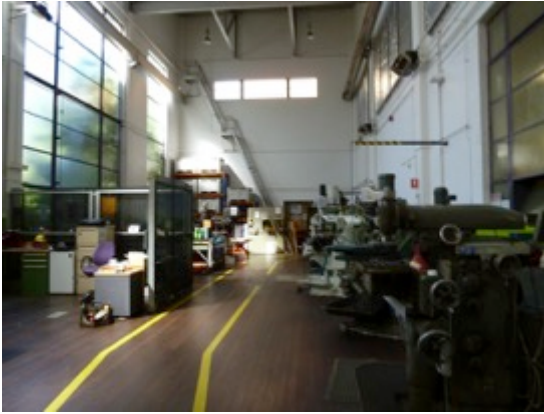
英語で質問する山崎くん

Lab Tour (3/11)

今回、実験の授業や研究プロジェクトなどで主に用いられている実験室を案内していただいた。学生が好きな時間に好きなだけ実験してよいように整っており、何かあればすぐに質問を受け付けてくれるスタッフがいるほか、大規模な実験設備を多く導入しているという印象を受けた。学生はプロジェクトに参加することで実験を繰り返し、さらに知識と経験を蓄えることができる。主に機械系、電気系、化学系の実験設備の見学をさせていただいた。

機械系

最初に、東工大のものづくりセンターのような部屋に案内された。しかし、東工大のものより大きく色々な道具が揃っているように感じた。近くでは学生が自作のレーシングカーを造っていた。これは成績がトップクラスの人のみしか参加できない人気のプログラムである。



機械系実験室の様子



レーシングカープロジェクト

電気系

次の部屋では、電流計などの機器が並び回路を組む実験が行える学生実験室に案内された。部屋の中は清潔に保たれていて、学生にとって実験しやすい環境だと感じた。



電気系実験室の様子

建築系

建築系の実験室ではコンクリートの作成や粉砕実験などを行える。設備は非常に大きい。建築系や電気系の実験室では液体を使わないため、Dry Lab.と呼ばれている。



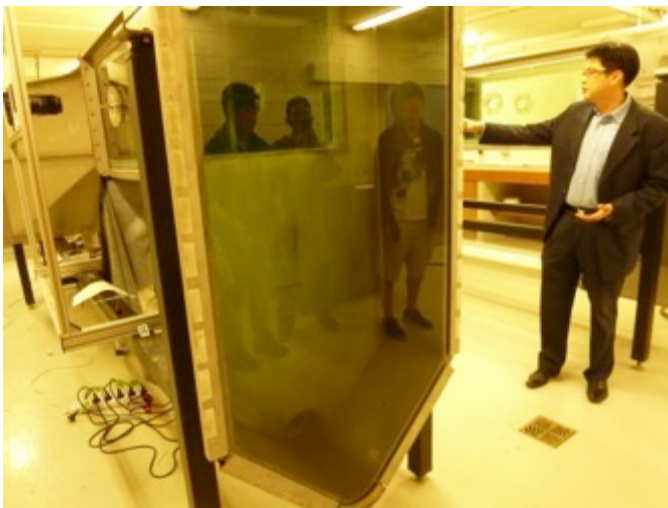
建築系の実験棟



コンクリートの耐久試験

化学系

最後に、化学系の実験室に案内された。案内された実験室では流体の研究のための大型の機器がたくさん置いてあった。また、巨大な蒸留装置などが置いてあり、驚かされた。さらに、多目的に大型の実験ができる広い空間が用意されていて、東工大では難しい大規模な実験が行えるようになっていた。



流体の実験装置

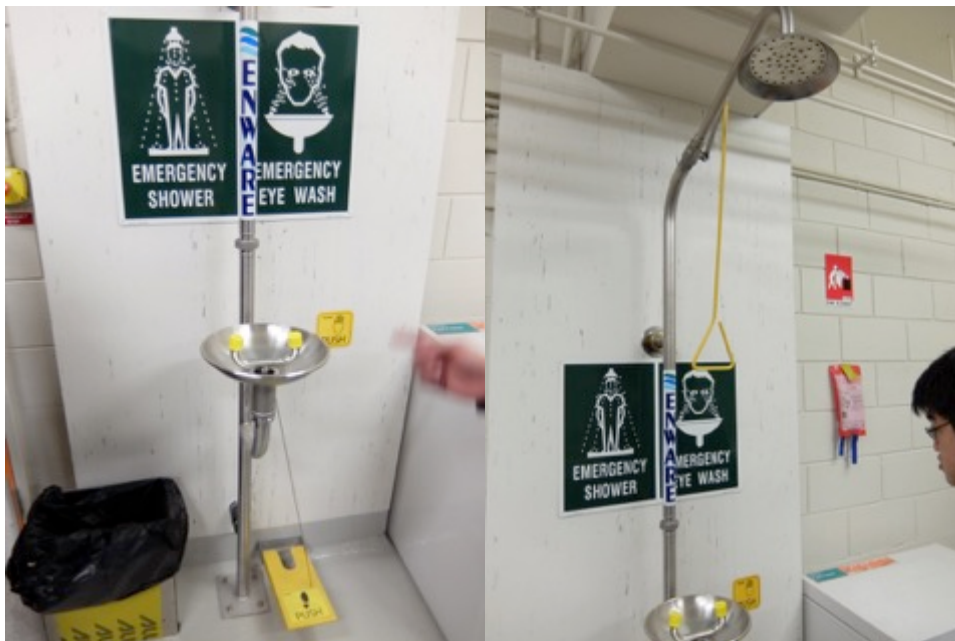


大型の蒸留装置

安全対策

東工大と同じように、実験中は白衣と防護メガネをつけることが義務となっている。メルボルン大学では緊急用のシャワーの他に目を洗う水道も用意されている。わかりやすく絵による標識があり、操作法も直感的になっている。このようにわかりやすくすることは

様々な生活環境で育った留学生の多いメルボルン大学において重要な安全対策であると感じた。



緊急用のシャワー

4.1.4 日本語クラスへの参加(執筆担当：飯田，衣川)

オーストラリアの生徒4人と日本人の生徒2人が一つのチームとなり，すべて日本語で様々な議論を行った．行われた議論の内容を生徒がレポートにして提出するというものだった．議論の際には与えられたテーマ以外にも，自己紹介をはじめとした個人的な話題からお互いの国の文化の違いに関する質問など幅広く意見を交換することができた．また日本に興味を持つ生徒が多く，授業後にも交流を続けることができた．



日本語クラスの様子

一クラスの人数は20人程度，講義は全て日本語で行われており，教師も生徒も日本語だけを話すようにしていた．講義計画によると，日常会話を学ぶだけでなくカタカナ語や流行語など日本語の変化を取り扱い，日本文化にも注目しているようだった．

今回の講義では、はじめに日本の英語教育の変化に関する NHK のニュースを視聴した。高校英語の授業が英語だけで行われるようになり、生徒と教師が苦勞しているといった内容のものだった。日本語だけの日本語の講義に対応できるオーストラリアの大学生にとって、なかなか可笑しな内容だったようで自然と笑いが起こっていた。

その後は、生徒 4~5 人のグループに東工大の学生が 1 人ずつ加わり、日本語でのディスカッションを行った。学年出身専攻など簡単な自己紹介を行った後、グローバル化に関するいくつかのテーマについてそれぞれ自分の考えを発表した。特に日本でのグローバル化の扱いに対し大変興味を持たれて、オーストラリアとの差異を確認できた。多民族社会のオーストラリアでは、日常でいろいろな国の出身者と交流できることがグローバルであると言うようだった。グローバル化のテーマを完了した後はフリートークになり、好きな日本文化や大学生活について話した。オーストラリアでの大学生活や日本文化の扱いなどを日本語で気軽に聞くことができ、オーストラリアの文化や価値観の理解が大幅に進んだ。授業後に東工大生同士でそれぞれのグループで話した内容を共有して知識を広げた。

Advanced Japanese の生徒は親のどちらかが日本人であるか、日本に数年以上留学した経験がある人が多く、日常会話にほとんど支障がない生徒が多かった。ただし、課題として日本語での日記やグループでのプロモーションビデオの作成等、高度なものが出されて厳しい講義であるようだった。

4.1.5 学生交流(執筆担当：竹中，衣川)

学生交流 (プログラム内)

予定されていた学生交流のプログラムとしては 3 つ、日本語クラスへの参加、化学工学科のランチパーティーへの参加、日本語会話クラブとの交流があった。

① 日本語クラス

受講する生徒とのディスカッションが行われた。まずグローバル化に関するテーマでお互いに興味があることを日本語で質疑応答しあい、お互いの文化や価値観を知ることができた。生徒たちは日本の留学経験や日本人の親がいるなどで、日本語が非常に堪能だった。

授業後に Facebook などの SNS のアカウントを教え合い、メルボルンでの自由時間に夜ご飯を一緒に食べに行く約束をとりつけられた。

② 化学工学科ランチパーティー

メルボルン大学の化学工学科学生ユニオンでは、2~3 週間に一度ランチタイムにピザやビールを用意して庭でパーティーを行っており、そこで化学工学科の学生と英語での会話

に挑戦した。話しかける勇気がなかなか持てず、満足した交流が持てたとは言えなかった。何とか話しかけることができると、こちらの拙い英語をよく汲み取ってくれてフレンドリーに話してくれたので、恐れずに話していくことが大事だということがわかった。Masterの生徒が多く、研究内容や大学生活の話聞くことができた。



化学工学科ランチパーティーの様子



学生や教授と仲良くなれる

③ 日本語会話クラブ

日本語会話クラブはメルボルン大学のサークルの一つで、日本文化が好きな学生が集会を開いて、英語日本語入り混じって談話するサークルである。今回は有志が日本の東日本大震災復興ソングである「花が咲く」を合唱していただいた。筆者自身としてはクラシックギターで練習している曲なのでとても嬉しかったが、会話クラブのメンバーでも知っている人はあまりいないようだった。会話を目的にするサークルなので、話しかけると嬉しそうに答えてくれ、すぐに仲良くなることができた。好きなアニメや音楽の趣味の話で盛り上がり、時間があっという間に終わってしまった。日本語クラスと同じように SNS アカウントを交換して、自由時間に観光案内を頼んだり、バーでの飲み会を企画したりできた。



日本語会話クラブの様子

全体を通して、こちらの英語力が足りずに交流の機会を逃してしまったことが多かった。特に化学工学科のパーティーでは、全て英語での会話だったため十分な意思疎通ができたとはいえ、一番の課題だと言える。英語で話しかけ、日本語クラスと同じように遊びに行く約束ができるようになれば、グローバル化への大きな一歩が踏み出せたと言えるだろう。また、日本語であっても、メルボルン大学の学生と交流できたことによって、メルボルンの大学生のことが知ることができ、文化や習慣など様々なことに興味を持つことができた。この経験は今後の海外活動に大いに役立つであろう。

学外での学生交流

“Advanced Japanese”と“Japanese Kaiwa club”で知り合った学生と一緒に3/12と3/14の夜に食事をしたのでそのことについて記す。まず3/12についてだが、私たち8人全員と現地の学生4名で、イタリア料理店で食事をした。現地の学生のうち二名は日本に滞在していた経験もあり非常に日本語が流暢であり、また彼らがお店を予約してくれた。授業のときと違い、“グローバル化”や“若者あるいは文化によって生み出された日本語”といったまじめな話題ではなく、食の話題から流行っているものについてなど様々な話をした。特に印象的だった話はバレンタインの話題であり、こちらでは義理チョコというものがないこと、男性から女性にチョコ(時にバラ)を渡すケースもあることなどが日本と違うなと感じた。また彼らは日本の芸能人や映画作品について非常に詳しく、逆に私たち日本人が知らない女優さんやモデルを知っていたということも少なからずあった。日本語が流暢、あるいは日本語を学ぼうと意思のある人は、そのようなサブカルチャーに精通している人が多いのかなと感じた。今思い返してみると、授業のときも日本語が上手な人ほど、アニメや漫画、ドラマなどに詳しく思ったと思う。



イタリア料理店での学生交流の様子

続いて3/14の食事について言及する。3/12のときと同様に私たち8人全員と現地の学生4人でパブに連れて行ってもらった。このときの話は日本の飲み会とメルボルンの飲み会の違いやお酒の話題が中心であった。例えば日本では“サイダー”というと甘い炭酸のソフトドリンクを頭に浮かべる人が多いと思うが、メルボルンでいう“サイダー”はソフトドリンクではなくれっきとしたお酒のひとつである。ビールと同様に人気の高いお酒であり、日本にメルボルンのような“サイダー”がないと伝えるとむこうは驚いていた。飲み会の場でよく行われているゲームを教えあい、全員でやった。日本でやられているものと似ている部分もあったが、全員が楽しめ、非常に盛り上がった。たとえ国や文化が違ってても考えることに大きな差はないのかなと私は感じた。またここまで彼らと打ち解けることができたのも、彼らの日本語が流暢でかつ彼らが日本に対して高い関心を持っていたからだと思う。このことから私達も流暢に英語を話せるようにすることで、世界の人々との距離を縮めることができるのではないかと個人的には感じた。



Pub での学生交流の様子

4.2 メルボルン市街での生活

4.2.1 食事(執筆担当：山崎)

市内には欧米系の料理だけでなく、東南アジア系や中国系、日本料理の店も多数存在する。そこでメルボルンでの食事についてテーマ別にまとめた。

① 朝食

朝食は毎日ホテルで用意された。メニューは、ベーコンやソーセージ、スクランブルエッグ、ハッシュポテトの他、シリアルやパン、ヨーグルトといったものである。これらの

ものは毎日用意されるため、その日の気分に合わせて朝食をとることができる。ホテルのため価格は宿泊費に含まれる。



シリアル、ヨーグルトなど (左)
ベーコン、ハッシュポテトなど (右)

② 軽食

メルボルンは物価が高いので、食費がかなりかかる。食費を浮かせたいときにオススメのものとしてトルティーヤがある。価格は\$6 でボリュームがあるため、これで1食済ませることができる。



トルティーヤ (正面)

トルティーヤ (内側)

③ 各国の料理

メルボルンには世界各国の料理店が存在する。その中でもオススメの料理、お店を紹介する。

MEKONG (ベトナム料理)

ベトナム料理店でおいしいフォーが有名である。ここでは、フォーと春巻き、生春巻きを食べた。フォーは牛肉か鶏肉と一緒に入れるホルモン類を選ぶことができる。価格は

\$10.9. ビーフスペシャルといったスペシャルメニューは値段が変わらず全種類のホルモンが入っていてお得。フォーはベトナム風のうどんだが、MEKONGのフォーはスープの出汁が効いてとても美味しく、肉やホルモンもやわらかくて食べやすい。唐辛子のスライスがテーブルに置いてあり、スープに少し入れるだけですごく辛くなり、辛口が好きな人は味の変化を楽しむことができるだろう。春巻きはベトナム料理というより中華のイメージがあるが、とても美味しかった。価格は \$5。小ぶりのサイズだが、ぱりぱりの衣にお肉が詰まっている。MEKONG での一押し料理。来店した時にはフォーだけでなく春巻きもオススメする。生春巻きは、あっさりしているのでサラダ感覚で食べることができる。価格は\$5.5。甘口のソイソースをつけて食べる。ソイソースに独特の風味があるので、苦手な人がいるかもしれない。



フォー



春巻き（奥）と生春巻き（手前）

居酒屋 八兵衛（日本料理）

日本の”安くて旨い気軽な”居酒屋を体験することが出来る居酒屋風レストランであった。日本人の店員が接客し、予約の電話や注文まですべて日本語でOK。メニューは非常に豊富で、およそ 100 種類以上。どれも日本にある品目ばかりで手軽な値段のものが多い。もろきゅう、キムチ、刺身の盛り合わせを注文した。もろきゅうはキュウリを赤味噌に付けて食べ、日本で食べるそれと何も変わらなかった。刺身の盛り合わせはマグロ、サーモンに加え、季節の白身魚を板前さんが新鮮なまま捌いてくれる。メルボルンにいながら、日本を体験することができた。日本が恋しくなったら、この居酒屋 八兵衛はかなりオススメだ。



刺身



もろきゅう

ココナッツジュース

ビクトリアマーケットの夜市の屋台で見つけた面白い飲み物。味はほんのり甘くかなりの量が入っている。ココナッツの面白いところとして、飲んだ後にその実を食べることができる。実はやわらかく、味はジュースとほとんど変わらない。日本ではお目にかかれないので水分補給がてら是非ためしてほしい一品である。価格は \$6.



ココナッツジュース (飲むとき)



ココナッツジュース (食べる時)

④ ファストフード

ファストフードは、マクドナルド、ケンタッキー、ハングリージャックス (バーガーキング) などが数多く点在している。その中で現地の人に勧められたハングリージャックス (サザンクロス駅) に立ち寄った。オーダーのシステムは日本と変わらなかった。写真のメニューで価格は\$13.55 である。牛肉はジューシーであり日本のものよりも美味しかった。チキンは、日本とあまり変わらないが若干スパイスが効いていて人によっては違和感を覚えるかもしれない。日本と大きく違い客席はあまり綺麗とは言えず、補修されずにほったらかしの座席もあった。



ビーフバーガー(奥)とチキンバーガー(手前)



補修されていない座席

⑤ ディナー

オーストラリアでは、オージービーフを使ったステーキやカンガルーの肉を使ったバーガーなどが頂ける。そんなオーストラリア料理を紹介する。

RARESTEAKHOUSE

メルボルン市内に3ヶ所あるステーキハウス。店は予約制であり、スーツを着たビジネスマンと思われる人たちで店が賑わっていた様子からも少し敷居の高い店であったような感じがした。しかし、値段はステーキハウスとしてはそこまで高くなく、\$35からステーキを注文することができる。私はTボーンステーキ500g(\$40)を注文した。調理に時間がかかるのかそれとも店が混んでいたからなのか分からないが、ステーキを持って来るまでかなり待たされた。何回か催促を促そうとも考えたが、ウェイトレスから待たせてすまないという言葉は何度もかけてもらったので、特にいらだつことはなかった。ステーキの味は絶妙であり、肉も柔らかく食べごたえもあった。会計のときにミントチョコレートを渡され、また再度待たせてしまったことをお詫びしていた。味も接客も満足だったので、もしもう一度自分がメルボルンに来るときがあればここに訪れたいし、メルボルン在住の人にはこの店を勧めたい。



Tボーンステーキ

Roo Steak Sanga

ビクトリアマーケットの夜市の屋台で“Roo Steak Sanga”を食べた。“Roo”はカンガルー，“Sanga”はオーストラリアのスラングでバーガーやサンドイッチを意味する。バンズにレタス・トマト・タマネギ・カンガルーの切り身をはさみ、BBQソースをかけたもので、1個\$12だった。1度はカンガルーの肉を食べてみたいと思っていたので、注文した。ソースの風味がかなり強かったこともあってか、臭みはあまり感じられず、噛むほどにラム肉に近い味がして、美味しかった。



Roo Steak Sanga

⑥ デザート

最後にオーストラリアのスイーツを紹介する

アイスクリーム

大学近くの Lygon St. 付近にあるアイスクリーム屋で食べた。日本にはないようなフレーバーがあった。例えば、ドラゴンフルーツ、ライチ、ドリアンなどである。また、日本とは比べ物にならないような大きさと提供されたことに驚いた。extra small で注文したが十分な満足感が得られた。価格は \$5 程度



いろんなアイスクリーム

⑦ ココショコラ

ココショコラはロイヤルアーケードにあるチョコレート菓子屋である。店は一階にチョコレートショップ，二階と屋外にホットチョコレートやチョコケーキを楽しむことができるカフェが併設している。メルボルン大学の男子学生 2 人と一緒に入ったが，ちょうど 3 月 14 日のホワイトデーだったので少し肩身が狭かった。注文したのは 5 種類のケーキとアイスクリームがワンプレートになったメニューを 3 人でシェアして食べた。それぞれを単品で頼むと \$40 近くなる組み合わせだが \$26 ドルで食べることができる。特に，ムースとクランベリーが美味しかった。



左から，チョコムース，チョコケーキ，クランベリーケーキ，キャラメルケーキ，チョコレートアイス

4.2.2 街の様子(執筆担当：山本)

ビクトリア州の州都メルボルンは、シドニーに次ぐ大都市(人口約400万人/2011年)で、エコノミスト誌の「世界で最も暮らしやすい都市」で二度に渡り一位を獲得している。生活水準、教育水準が高く、治安も安定しているため海外からの移住者が多い多文化都市として知られている。また、数々のアートギャラリーと博物館、王立展示館とカールトン庭園(世界遺産)を有しており、ロンドン、ニューヨーク、パリに次ぐ多さで世界の学生が学ぶ、国際的な学術都市である。さらに、テニスの全豪オープン、F1グランプリ、また毎年メルボルンカップなどが行われるスポーツ都市としても有名。講義の合間にメルボルン市内を探索し魅力的だったスポットを紹介する。

ビクトリア州立図書館

ビクトリア州立図書館は160年前に創立された、ビクトリア州で最も大きな図書館である。欧米風の広々とした立派な建物で、図書館の前には芝生広場が広がり、学生がリラックスしながら学校のレポート等をまとめている姿や、読書している姿が見られる。地面にチェス盤が描かれているスペースがあり、図書館が用意した駒を使ってチェスをしている人もいた。

また、ときどき図書館の外でストリート・ミュージシャンやダンサーが演奏やパフォーマンスを披露し、芝生広場にはたくさんの人が集まる。夜もライトアップされ、カップルやグループでにぎやかである。図書館の中にはフリーWi-Fiが用意されており、インターネットが使える状況にある。とても広々としていて勉強や調べものをするにはかなり快適な環境であった。また、内部はいくつかのスペースに分かれており、ある1つのスペースでは学生たちがテーブルを囲んで議論を交わしながら課題に取り組んでいる姿が見られた。中には、展示物もあり、観光客にも楽しめる場所である。死ぬまでに一度は行ってみたい！世界のスゴすぎる図書館15選にも取り上げられている。広々としている上に建物がおしゃれで、入り口は芝生の広場となっており、思わず入って勉強したくなるような雰囲気をもつ図書館だった。



図書館の内部



展示物も数が多い



巨大なチェスで楽しむ

イアンポッター・センター(NGV オーストラリア)

オーストラリア国内の作品を2万点以上収集・展示する美術館で、特に19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍したトム・ロバーツ、フレデリック・マクビンなどオーストラリアを代表する画家の作品が観られる。オーストラリアの風景を描いた油絵やコンテンポラリーなアボリジニアートなど見応えのある作品が数多くある。



オシャレな外観

イアンポッター美術館(メルボルン大学)

メルボルン大学内にある美術館で、大学ゆかりのアーティストをはじめコンテンポラリーや考古学や写真など多彩なコレクションを取り揃えている。1階では iPad を使って説明を見ることができ、書籍コーナーには美術作品に関する本に交じって日本のアニメを紹介する本もあって大変興味深い。



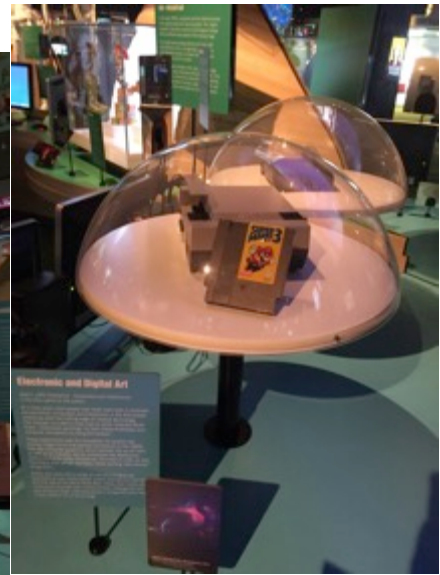
美術館の外観

ACMI(オーストラリアンセンター・フォー・ザ・ムービングイメージ)

ふたつの劇場で独自のプログラムやユニークな作品を上映する映像センター。「スクリーンワールド」には、映画・テレビ・デジタル映像が発達してきた歴史についての展示やファミコン・NINTENDO64などのゲームを体験できるコーナーなどもある。インベーダーゲームやスーパーマリオ 64 など昔懐かしいゲームもプレイできる。



懐かしい映画たち



懐かしいゲーム

メルボルン博物館

メルボルン博物館は、メルボルンセントラル駅から徒歩15分ほどの所にある博物館である。隣には世界遺産の王立展示館があり、博物館でツアーを申し込むことで内部を見学できる。博物館と王立展示館の周りは広大な芝生の公園になっており、近くの保育園の子供たちが遊びに来たり、花の展示会を行っていたりする。メンバーシップに登録するか、学生証を提示すると無料で展示を見ることができる。メルボルン博物館の展示は、恐竜、動物、虫、海洋生物、森林などの自然科学や、火山や鉱物などの地球科学、人間の体と精神の働き、アボリジニーの生活や文化を紹介するもの等がある。虫のブースでは、生きた昆虫や蜘蛛などが数多く展示されており実際に動く虫を観察できる。森林ブースは実際の植物を成育しており、川の流れや自然環境を再現した森の中をあるいて見学することができる。人間について扱う展示では、身体を解明していく歴史や内臓の働きを分かりやすい図や装置を使って説明していた。精神の働きの展示では、人の感情と脳の働きの関係や脳波測定などの人体実験の展示や、夢を再現した映像や装置等とても面白い内容だった。全体的に暗く怪しく作られていて、ホラーアトラクションのような雰囲気、ホラーが好きな人はすごく楽しめるはずだ。一緒に見ていた子供が泣きだすほど怖い展示もある。アボリジニーの展示では、アボリジニーの衣装や盾の模様の違い等を紹介していた。イギリスが植民地支配のためにオーストラリアに侵攻する様子や、第一次世界大戦時の状況などの展示も行っていた。アボリジニーはオーストラリア独特の展示であるから、他では見られないだろう。

全体として、サラウンド音声を使った迫力あるBGM、タッチパネルやCGを使った展示

が多く、興味を引く工夫が多くされていた。日本に比べ、広大な敷地があるので大規模な装置やいろいろな展示を行っていてとても面白かった。とても広いので、全体を見て回るのがに2時間以上は時間をとった方がいいと思われる。



メルボルン博物館

王立植物園および公園

スワンストーンストリートを南下し、ヤラ川を渡った先にアレキサンドラガーデンズ、クイーンビクトリアガーデンズ、そして王立植物園がある。アレキサンドラガーデンズとクイーンビクトリアガーデンズは庭園というより閑静な公園であり、ランナーの方や大学のボート部(ヤラ川が近いので)の人たちが利用していた。また私達が訪れたときはフェスティバルの最中であったということもあり、夜は仮設遊園地があり賑わっていた。王立植物園は広大な敷地を持った庭園であり、様々な種類の植物が植えられていた。また多くの鳥を見ることができるので、バードウォッチングに向いていると思われる。



王立植物園の様子 ヤラ川でのボード部の活動



王立植物園で見かけた鳥

クイーンズビクトリアマーケット

ビクトリアマーケットは日本でいう卸売場のようなところであり、メルボルン市内で一番大きな市場である、ノースメルボルンに位置し、大学の南側にあり、徒歩20分ほどで向かうことができる。ビクトリアマーケットは昼と夜で全く異なった楽しみ方ができる。



昼のマーケット



ナイトマーケット

昼間は新鮮な野菜や果物などの食材が並び、値段も良心的なため、地元の主婦や観光客で賑わっていた。とても広大な土地であるため、全てをじっくり見て回るには半日以上かかってしまうと考えられる。周りにはカフェやレストランが並び、ストリートミュージシャンはタンゴを演奏しとても陽気な雰囲気だった。普段は17:00までの営業だが、毎週水曜にはナイトマーケットが開催され22時までの営業となる。ナイトマーケットは昼間とは雰囲気がガラッと変わり、野菜や果物などの食材の代わりにたくさんの屋台が並び、まるでお祭りのような雰囲気だった。屋台にはハンバーガーやホットドッグ、中国料理や日本料理、韓国料理、インド料理やスリランカ料理など様々な国の料理の屋台が並び、見て

いるだけでも飽きなかった。屋台で売られる商品の値段は約\$10であった。屋台の周りにはアクセサリやポスターショップなどのお土産が多く、タトゥーペイントの体験ができる店もあった。

路上ライブでジャズを演奏しており、とても落ち着いた穏やかな時間を楽しむことができた。



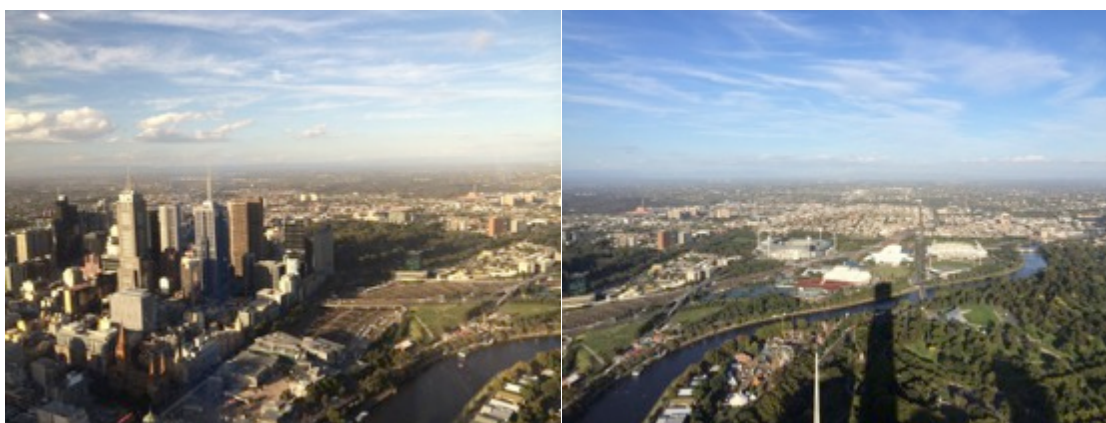
タトゥーペイント中



上質なジャズを無料で聴ける

ユーレカスカイデッキ 88

ユーレカスカイデッキは南半球で最も高い展望台をもち、世界で初めての‘EDGE’体験が可能な高層タワーである。88階の展望台からはメルボルンを一望できる。



展望台からの眺め

金網越しに外の景色を見ることができるエリアも存在し、88階の強い風を浴びることができる。‘EDGE’体験とは、透明なガラス張りの箱の中に入場者が入った後タワーから箱だけが突き出て、箱の中の透明な足元から真下の地面までを見渡せてしまうというアトラクションである。

メルボルンパーク

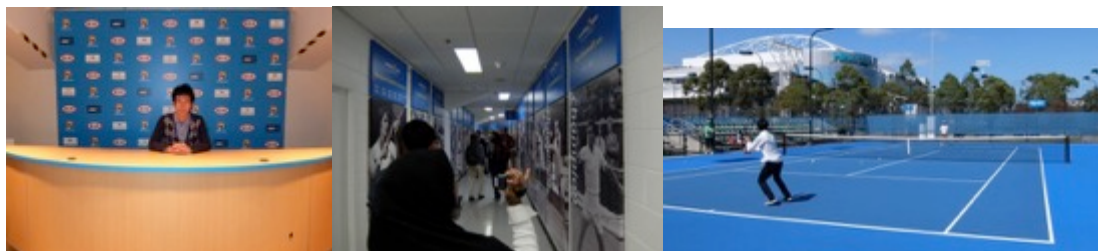
メルボルンパークは日本の錦織圭も活躍した、全豪オープンテニスの会場として有名である。トラムの停留所が隣接しており、ホテルから 20 分程度で行くことができた。3 つの屋根付きのアリーナと会議場、30 以上のテニスコートがある。日本の有明テニスの森に、アリーナを 2 つ足したような、コンサート等のイベントにも用いられる施設である。クリケットグラウンドやサッカー場なども隣接している。私たちが行ったときは会議場で催しがある以外にイベントは無く、少し閑散としていた。コートは有明とは違い、全て 1 コートずつフェンスで区切られており、一般人も 1 時間\$30 で使用できるが、少し高いためかコートには空きがあった。ショップでは全豪オープングッズが販売されていた。

\$15 で参加できるガイド付きのツアーに 4 人ほどで参加した。これはメインアリーナ(ロッドレーバーアリーナ)のロッカールームなど選手しか入れないゾーンや会見場、アリーナのスーパーボックスなどを回るものであった。会見場で写真撮影をできたり、テレビで見たことのある選手が試合前に通る廊下に行くことができたりして、非常に満足いくものであった。選手のサインもそこかしこに掲げられていた。他にも\$20 でテニス体験ができるプログラムがあるようであるが、参加はしなかった。

私はテニスが好きなので、初めてグランドスラムの会場に行くことができ、非常に嬉しかった。別日に 1 人で行った時に、家族連れにお願いして、少しだけだがテニスをさせてもらうことができた。全豪を印象づける真っ青な Plexicushion コートで、実際にプレーすることができ、非常に良い思い出になった。



メルボルンパーク全景



会見場にて

コートにつながる廊下

テニスをしているところ

4.2.3 郊外でのアクティビティ(執筆担当：川淵，竹中，黒川)

フィリップ島

メルボルンに到着したその日に学生全員で向かったツアー。フィリップ島はメルボルンの南東側に位置する。ツアーの途中で保護区域内のユーカリの木の上に生息しているコアラを探したり、野生のワラビーを目にすることができた。



コアラ



ワラビー

フィリップ島の最大の目玉であるペンギンパレードでは、日が沈みあたりが暗くなった後、海から巣へ戻ってくるフェアリーペンギンを間近で見ることができる。ペンギンたちは危険を回避するために数匹ずつのコロニーを形成して巣に戻ってくるといったことだった。また、夜遅くになると星空が非常に美しく、人工的な手入りを最小限にとどめたフィリップ島の自然の多さをうかがわせた。



ペンギンパレード



真っ暗なので夜空が綺麗

グレートオーシャンロード

グレートオーシャンロードは、オーストラリア南東、ビクトリア州沿岸に走る道路を指

している。第一次・第二次世界大戦間の大恐慌の時期に建設が始められ、シャベル、ダイナマイト等を使って人力で16年かけて完成させられた。景観が非常によく、観光地として有名なほか、車のCM等によく使われている。

グレートオーシャンロードはメルボルン市内から片道約280kmもあるため、現地の旅行案内所に行き、Great Sights Melbourne という会社のツアーに申し込んだ。ツアーは朝の8:00から夜の7:30頃までかかり、以下のようなコースを通った。



グレートオーシャンロードツアーの観光コース

またこのツアーは人気が高く、全部で30~40人ほど参加しており、私達以外の日本人もいた。

メルボルン市内から2~3時間ほどでグレートオーシャンロードの入り口に到着した。入り口は写真のようになっており、グレートオーシャンロードの歴史などが記された石像や記念碑が立っていた。



グレートオーシャンロードの入り口

入り口を通過後、昼食をとり本ツアーの最大の見所である12使途に向かった。これは突

き出た 12 の奇妙な形をした岩をキリスト教の“12 使途”にかけたことに由来している。しかし現在では風化や波による浸食によりひとつの岩が崩れ、全部で 11 しか岩がない。



12 使途

12 使途を見た後は 2km ほど移動し、ギブソンステップと呼ばれる場所に行った。そこから階段で海岸まで降りて行った。その後はロックアード・ゴージと呼ばれる入り江に行った。グレートオーシャンロードは強い風と波が吹き荒れていたが、この場所だけは比較的穏やかであったため、海水浴を楽しんでいる人もいた。



入り江の様子

F-1 グランプリ

メルボルンでは 3.12~15 に世界的に人気のある F-1 の開幕戦が行われる。メルボルンの公道を利用した市街地コースを F-1 が走り、湖を囲んだコースは雄大な自然とメルボルンの綺麗な街並みを楽しめる。



F-1 オーストラリアグランプリ



コース概要

入場した観客はスタンド席や芝生の上で観戦し、間近で F-1 のスピードを体験することができる。芝生での観戦の場合、観客はかなり多いので、立ちながらの観戦となる。



芝生の上での観戦



クラシックカーレースの準備中

F-1 は 3 回のフリー走行、予選、決勝の流れで行われる。F-1 の他に、年代物の車が走るクラシックカーレースやポルシェだけで競い合うポルシェカーレース、V8 エンジンを搭載した SUPERCAR championship などのレースも観戦することができる。レースの間には飛行機のアクロバット飛行なども楽しむことができる。



超至近距離で観戦できる



アクロバット飛行も超至近距離

コーナー付近に席をとっておけば、コーナーでのオーバーテイクや壮絶なクラッシュなど、レースの盛り上がるポイントを楽しむことができる。周りの観客と一体となり、好きなチームを応援するのはとても気分が良い。

5. 所感

飯田侑美

実際に自分の足で歩き空気を肌で感じることで、日本では決して味わうことのできない貴重な生の体験をできた。オーストラリアに行き毎日が驚きと発見の毎日だったが、その中でも特に印象的だった日本との違いを3つ挙げる。1つ目は人種の多さである。白人に負けないくらいアジア系の人が多くいて、街中を歩いているだけでも自分が外国人という感覚がないくらいに自然に溶け込むことができた。またメルボルン大学でできたオーストラリア人の友達に聞いても、親がヨーロッパやアジア出身だったり日本出身であったりと街中の人種の多さがうなずけるような人が多かった。2つ目は傘をさしている人が少ないということである。晴れの日には日差しが強いためみんなサングラスをかけているが、男の人のキャップ以外に帽子をかぶっている人は少なく、ましてや日傘などさしている人は一人もいなかった。雨の日も、それほど強く降ってはいなかったが日本人なら傘をさすような降水量でも傘をさしている人はほとんどいなかった。これはメルボルン大学で授業が始まるのを床に座って待つ生徒が多いことや、靴を脱がずにベッドで寝るという習慣からみられるように、衛生に対する意識が違うためではないかと思う。3つ目は人々がフレンドリーだということである。街中やホテルを歩いているときやトラムの席が近くて視線が合うと会釈や気軽に声をかけてくる人が多く、日本にいるときよりも他人との距離を近く感じた。また授業中に隣の人と対話や知らない人どうしでグループディスカッションをする時にも日本のときよりも肩の力が抜けて自然に会話のできたので、日本でもこのようなコミュニケーションにおける柔軟さが必要だと思った。

メルボルンは食べ物のバラエティに富んでいて、しかもとてもおいしく、街中はストリートミュージシャンによる心地よい演奏にあふれており、図書館やトラムや美術館などの施設も充実していて、街中の建物はヴィクトリア州の名前にふさわしいヨーロッパ調のものからコンテンポラリーで芸術的な建物まで目を見張るようなものも多く自然も富んでおり、人々は優しく笑顔にあふれていて、住みたい街ランキング 1 位なのがうなずけるとても良い町だった。郊外に出ると雄大な自然が広がり、ツアーで行ったフィリップ島で見た野生のペンギンやコアラも、心なしかメルボルンの人たちと同じでのびのびと過ごしているように見えた。留学や英語に対する不安や外国に対する恐怖を持っている人がいたら、メルボルンは街も大学も雰囲気がいいし日本語クラスでは日本語で積極的に友達になってくれる人がたくさんいるので、ぜひこのプログラムに参加してみるといいと思う。1 年生は私一人だけで最初は不安だったが、友達もできてとても楽しかったしメルボルンの様々なものにふれて視野を広げることができとても有意義な体験となった。本当にメルボルンに行って良かった。

衣川寛知

留学に来るまでは、1 週間以上旅行することは初めてで、長く果てしない旅だと思っていたが、実際に来てみれば大変充実したあつという間の 1 週間であった。

留学には、英語力の向上と将来長期の留学することを考えて下見を目標に参加した。これらの目標が達成できたかといえば、想定していたよりもずっと良いものが得られたと思う。メルボルン大学の学生と交流したことにより、外国の大学での勉強や研究と生活を具体的に知ることができた。以前は、英語だけの環境や一切知り合いのいない環境に大きな不安を持っていたが、フレンドリーな学生や先生と話したことで、ずっと前向きになれた。実際に見てみないと分からないものがある。自分もたったの 1 週間少しの授業を受けただけであり、もっと長く本格的に生活して勉強に励むと見えてくるものがあるだろうか。英語力については大幅な成長、とまではいかないまでも日本で机で勉強するよりもずっと役に立つものが得られた。特に英語を聞き取る能力が高くなり、稚拙な英語でネイティブスピーカーに言葉を伝えるコツ等も得られたと思う。ただし、このプログラムでは日本語クラス等、日本語が堪能な学生と多く交流するのでどうしても日本語に逃げてしまうことがある。英語力が足りないことが原因であり、さらなる研鑽が必要だという強い実感を得られたことは無駄ではない。メルボルン大学のインドネシア出身の学生に聞いたことだが、日本人だけが「生きた英語」というものがあると思っているらしい。英語は言葉であり、イギリス人が話そうが、誰が話そうが使われている限り、英語は英語なのだそう。いくら稚拙だと感じようが、臆さず使わなければ英語は生まれぬ。

メルボルンは綺麗な建物や多国籍の美味しい料理、過ごしやすい気候など、1週間では満足できない程快適に過ごすことが出来た。メルボルン大学は設備もよく、いろいろな熱心な学生がいて大変面白い所だった。暮らしてみたい街、学んでみたい大学だと思えるような素晴らしい体験ができた良い留学だった。

川淵愛子

この派遣プログラムに参加した目的は英語や海外に対して感じている壁を取り払うことであった。メルボルン滞在中のおおまかな動きは、平日は大学で講義を受けた後中心街を観光し、休日はツアーに参加し遠出をするという具合であった。そのため、一日一日をフルに使ってメルボルンの空気を感じ、また、英語に触れざるを得ない状況に身を置くことができた。

特に印象的で今の自分に強く影響したのは、様々なバックグラウンドをもつ人々といっぺんに触れ合ったことと、語学に堪能な学生ばかりに出会ったことである。私はこれまで自発的に海外に出向くという経験をしたことがなかったためか、日本国内で通じる常識や価値観に囚われていたようである。両親が国際結婚だった人や、両親がオーストラリアで生活してきたわけではないが自分はオーストラリアで生まれ育ったという人、メルボルン大学に留学に来ている人など、メルボルンは、世界各地から異なる文化や価値観を持った人々が集まっている都市だった。また、このように世界各地から人々が集まっても、共通語である英語で皆がコミュニケーションをとっている。日本でも英語教育がなされているが、日本語さえ使えば生活に困ることなど全くない。しかし、今後国と国との間の距離が縮んでいき、グローバル化が進んでいくことは明らかであることを踏まえれば、使える英語を話せるようになることをもっと重要視すべきであると強く感じた。母国語、英語に加えて、日本語の勉強をしているというメルボルン大学生に出会って、私も英語に壁を感じるなどと言っている暇はないと、自身の語学に対するモチベーションを引き上げることができた。

実質的な滞在期間は1週間程度であったため、海外の生活がどのようなものか深く理解するには実際に住んでみなければ分からないと感じたが、英語を使うことに関しては目的を達成することができた。ただ英語の文章をゆっくり読んで理解するだけでなく、コミュニケーションをとれるように、発音や会話文の習得から英語学習を進めていきたい。

中島健太

私はほとんど海外に行った経験が無いので、1度は英語圏の国に行ってみたいと思い、このプログラムに応募した。実際に1週間メルボルンに滞在して、このプログラムを選んで

本当に良かったと思っている。

オーストラリアは多民族性の強い国家だと知識では知っていたが、実際にメルボルンの街で様々な人種が混在する光景を目の当たりにし、衝撃的だった。半分近くがアジア系、もう半分が欧米人というような構成であった。交流した学生も海外生まれ等の様々な出自を持つ人がいた。日本では絶対に体験できない環境で、とても印象深かった。多民族都市であるものの、治安がとても良く、街中を気楽に動き回ることができた。これは欧米と違うところかもしれない。

1週間にわたり、一般学生に混じって授業を受けた。先に書いたように多人種が混じっているのに、日本人が数人紛れ込んでも、全く気に留める人はいなかった。先生方のスライドのクオリティが押並べて高く、驚いた。また、授業中に寝ている学生が本当に居なかった。授業によっては内職をする学生もいたが、階段教室のため先生と目が合うし、先生がジョークをよく飛ばしたり、クリッカーを使用したり、隣の人と会話させたり、50分授業が中心だったり、水を飲んでも良かったりするなどの環境・工夫の違いもあるのかもしれない。ただ、何より制度・社会の違いから、日本のように大学に惰性で入る人が少なく、学生の積極性が違うのだということをひしひしと感じた。

日本語クラスの学生は本当に上手な日本語を話していた。日本人は大学に入るため、テストで点を取るために文法中心に英語などを勉強しているが、彼らはコミュニケーションをとることを目的として、会話などを中心に外国語を勉強しているという相異があるのではないかと感じた。東工大で英語や第二外国語の授業が当該言語でなく、日本語で行われているという話をしたら、非常に驚かれた。

今回、現地学生と話す機会が何回もあったが、ネイティブの話す英語は聞き取りづらく、話しかけることをためらってしまうこともあった。ただ、こちらの言うことは一応通じるということや、英語もそれなりには聞き取ることができると分かって良かった。街や大学の人が皆、英語でコミュニケーションをとっており、非常に刺激を受けたし、これからは語彙力向上や実際に英語を話す機会を設けるなどの必要があると痛感した。

山本晃久

私はメルボルン短期留学プログラムに参加して、とても刺激を受け、感じるものも多かった。この短期留学では、大きく分けて、3つのことを行った。それは、観光、授業参加、学生との交流である。

観光をしている中で感じたのは、メルボルンは、非常に多国籍な地域であるということであった。町中に歩いている50%はアジア系の顔をしているといっても過言ではない。現地で仲良くなった友達に聞いてみると、メルボルンにいる人々はほとんどが移民だと

っていた。みんなの出身を聞いたら、オーストラリア人とオーストラリア人が結婚しているのは、あまりいなかった。そのため、みんな英語＋もう一言語しゃべれるのが当たり前な風潮があった。とてもうらやましいし、このままだとやばいと感じた。

また、メルボルンでの生活は非常に快適なものであると思った。交通整備もされているし、Wi-Fi もいたるところで飛んでいる、とても東京に似ていた。工事中の建物もたくさんあり、景気がいい証拠だなと思った。

授業では、学生たちのやる気が日本とかなり違うなと感じた。日本の学生は正直なところ午前中の授業などでは、眠っている生徒が多いと思うが、メルボルン大学の講義内で寝ている学生は一人もいなかった。みなが一生涯懸命授業を聞いていた。おそらく講義資料がすべて配布されているためだと思うが、メモを取ることはなく、みんな聞いて理解している様であった。メルボルンの文系の友達に聞いた話では、授業期間は非常に忙しく、予習復習に追われている毎日であると言っていた。1週間で50ページ以上は進むらしいので、英文を読むのが大変と言っていた。よく言われる「日本の大学は入るのが難しく、卒業するのが簡単。海外は逆に、入るのが簡単だが、卒業するのが難しい」という感じであった。

自分は学生との交流を非常に大切にしたい。授業で友達を作って、夜などは一緒にご飯を食べたり、飲み連れて行ったりしてもらった。そこで、英語を教えてもらったり、オーストラリアの生活のことや学校のことを聞いた。また、ネイティブの英語はかなりつながるし早くて全く理解できないという経験もできた。笑 このような経験は旅行などではなかなかできない、学校のプログラムならではのものだった。このプログラムでは、授業を受けるだけでは、学生との交流もほとんどなく、英語能力をあげるのは難しいと思うが、こういった学生との交流を自分で作って、話す機会が作れたのは、いい思い出となった。

最後に、1週間という短い滞在だったが、メルボルンで感じたことは多く、たくさんのご恩をいただいた。このプログラムを通して、メルボルン大学の学生みたいに勉強も頑張らないといけないと思えたし、もっと英語も勉強しなければいけないと思った。

黒川輝

今回、初めて海外の大学で生活し、英語での講義を体験することができた。今まで体験したことのない出来事がたくさんあった有意義な一週間であった。まず、はじめにメルボルンで一週間生活して感じたことは、とても住みやすい街であることだ。街全体が建物と自然が調和し、街並みがとても綺麗で歩いているだけで楽しかった。人混みが少なく、東京と違ってごちゃごちゃしていない、ゆったりとした雰囲気だった。街全体をトラムが回っていて、とても便利だった。物価が高いことを除けばとても住みやすいと感じた。つぎ

に、メルボルン大学に一週間通って思ったことは、大学の校舎外に多くの学生がいるということだ。メルボルン大学はキャンパスが自然に包まれ、とても過ごしやすい。学生たちは外で読書していたり、景色をスケッチしたり、スケートボードやサイクリングなど、非常にアクティブであることがわかった。それは、大学の外だけでなく、講義中でも同様だった。講義中は議論が絶えず、先生もそれを促していた。講義中に分からないところがあったら、手をあげたり、先生が話していても話を遮って質問したりしていた。メルボルン大学には講義であるレクチャーの他に、チュートリアルと呼ばれる授業がある。チュートリアルでは先生は講義をするわけではなく、生徒が質問するためだけの時間となっている。このような授業はメルボルン大学ならではのことであり、生徒が積極的だからこそ成り立っている授業であると考えられる。今回の留学では学生との交流する機会が非常に多かった。化学工学科のランチパーティーでは、地元学生と会話する機会があり、話す内容を聞き取ることが非常に困難だった。パーティーの中には高校卒業から大学に通っている日本人女性がおり、現地の学生ともスラスラと会話していた。彼女と話してみると、日本でかなり英語を訓練していたが、現地では通用せず、英語を実践しながら上達することが最も大事なことだと話していた。私自身、メルボルンに来た当初は英語を話すことにかなり躊躇していたが、些細なことでも英語を喋ろうと少しずつ挑戦してみた結果、話すことへの抵抗が小さくなっていった感じがした。日本語クラスに参加して感じたことは、失敗を恐れながらも、積極的に日本語で話そうとする学生が非常に多かったことだ。多くの学生が日本の文化が好きで日本語を勉強していたり、将来日本語を使った仕事に就きたいと考えており、日本語を習得することに対して、何かしらの動機や目的を持っていることがわかった。私自身、英語を習得することに対する動機や目的が曖昧なところがあり、何か目的を見つけて取り組んでいく必要があると感じた。今回の留学で得られた経験は日本では絶対に経験することができなかったと思う。日本とは異なる価値観や文化に触れることができ、人間としての幅が広がったと思う。お互いの国の文化や風習などを語り合うのは非常に楽しい経験だった。もっと多くの国の人と語り合えるよう、英語をどんどん実践して上達させていきたい。

竹中友浩

私はこれまでに旅行という形で何度か海外に渡っており、昨年にはワシントン大学で行われている語学プログラムにも参加した経験があるため、メルボルンでの生活やメルボルン大学を見たときの感動というのはそう大きくはなかった。しかし今回のような実際に行われている講義に参加をすることや、現地の学生と交流するといったことは初めての経験であったため、非常に刺激的だった。特に日本語クラスで海外の学生が日本語を流暢にし

しゃべる姿は印象的だった。私はこの授業の中で彼らになぜ日本語を学ぶのかを聞いた。日本語がしゃべれるようになっても日本でしか役に立たず、スペイン語や中国語を学んだほうがよっぽど役に立つと思う。それにもかかわらず彼らが日本語を学ぶ理由が気になって仕方なかったのである。彼らの答えは親の関係、将来日本と中国(中国出身の方が多かった)を結ぶ仕事がしたいなどいろいろあった。そしてこれらは私が予想していた答えである。予想外の答えというのは日本の漫画やアニメ、ドラマが楽しいからというそれだけの理由で日本語を学んでいることである。しかもそのように答えてくれた学生は他の答え(私の予想通りの答え)を言ってくれた学生よりも日本語が流暢だったような印象があった。彼らは純粋な関心だけでこれほどまでに日本語を上達させたのかと思うと少し衝撃的だった。私は今英語を勉強しているが、それは将来海外でも活躍できる職に就きたいという思いと英語ができることで自分の可能性を広げることができるという少し打算的な理由からである。継続しないとすぐ語学力は落ちてしまうし、正直なところ勉強もあまり楽しいとは思わない。それなので彼らのように好奇心で勉強ができることが羨ましくあり、また打算的にしか勉強をすることができない自分が少し情けないと感じた。

また話は少し変わるが、化学工学科との BBQ の時に知り合った学生が、語学を学ぶならまずその言葉が使用されている国に興味を持たないといけないと言っていた。そういつてくれた彼もまた日本のドラマに精通しており、日本語が流暢であった。これからは闇雲に英語を学ぶのではなく、背景(イギリスやアメリカのサブカルチャーなど)もあわせて学んでいきたいと思う。

山崎清行

今回のメルボルン大学への超短期派遣プログラムでは、今までの人生で経験したことのない貴重な体験が盛りだくさんでとても密度の濃い 10 日間でした。私は物心がついてから初めての海外旅行であったため、日本語以外で会話したことがほとんど無く、英語での授業や観光はとても新鮮でした。

授業以外の時間はメルボルン市内の観光、St. Kilda ビーチの海岸歩きや Puffin Billy 乗車ツアーに参加したりしました。市内は日本とは違い海外料理の飲食店が多くて海外出身の人や両親がオーストラリア人でない人でも過ごしやすい街づくりが行われていると感じました。街行く人もアジア系、ヨーロッパ系、アフリカ系と様々でした。このような街を日本では見たことがなくとても新鮮でした。ただ、街にはゴミがたくさん落ちていてゴミ箱からもゴミがあふれていたことが少し残念でした。メルボルン大学は、東京工業大学と

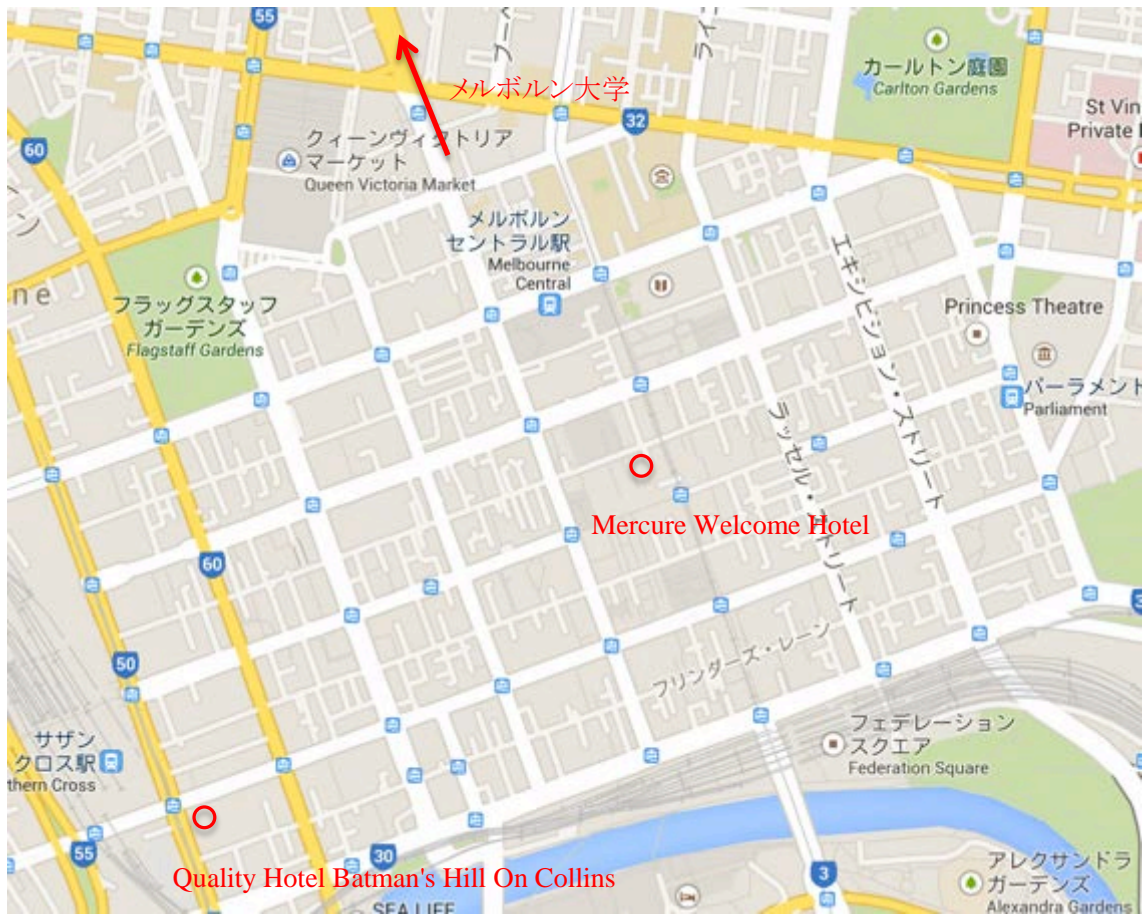
違い敷地が広く学生がくつろげる大学作りが至る所で行われていました。メルボルン大学の学食は様々な国の料理を食べることができて、留学生が過ごしやすい環境が作られていました。東工大でも、学食で留学生向けのハラルメニューがありますが、規模が小さいのと感じました。東工大への留学生を増やすためにはこのような環境作りが必要なのではないかと感じました。

授業は、化学工学を始めとして様々な分野のものに参加しました。多くの授業はスライドを使用していたので、授業内容はある程度把握できましたが、全く聞き取れなかった英語も多く、もし今のまま留学しても新しい内容の授業を理解することは難しいと感じました。しかし、行われていた授業レベルは東工大と同程度であったのもっと英語を勉強すれば、英語圏への留学に関しては思った程高いハードルではないのかなとも感じました。これからは、英語で質問や意見を言えるようにして海外の人たちと研究についての議論ができるように英語をもっと勉強しようと思いました。また、現地の人と連絡先を交換したので、彼らと連絡を取り合っ情報交換を盛んに行っていこうと思いました。

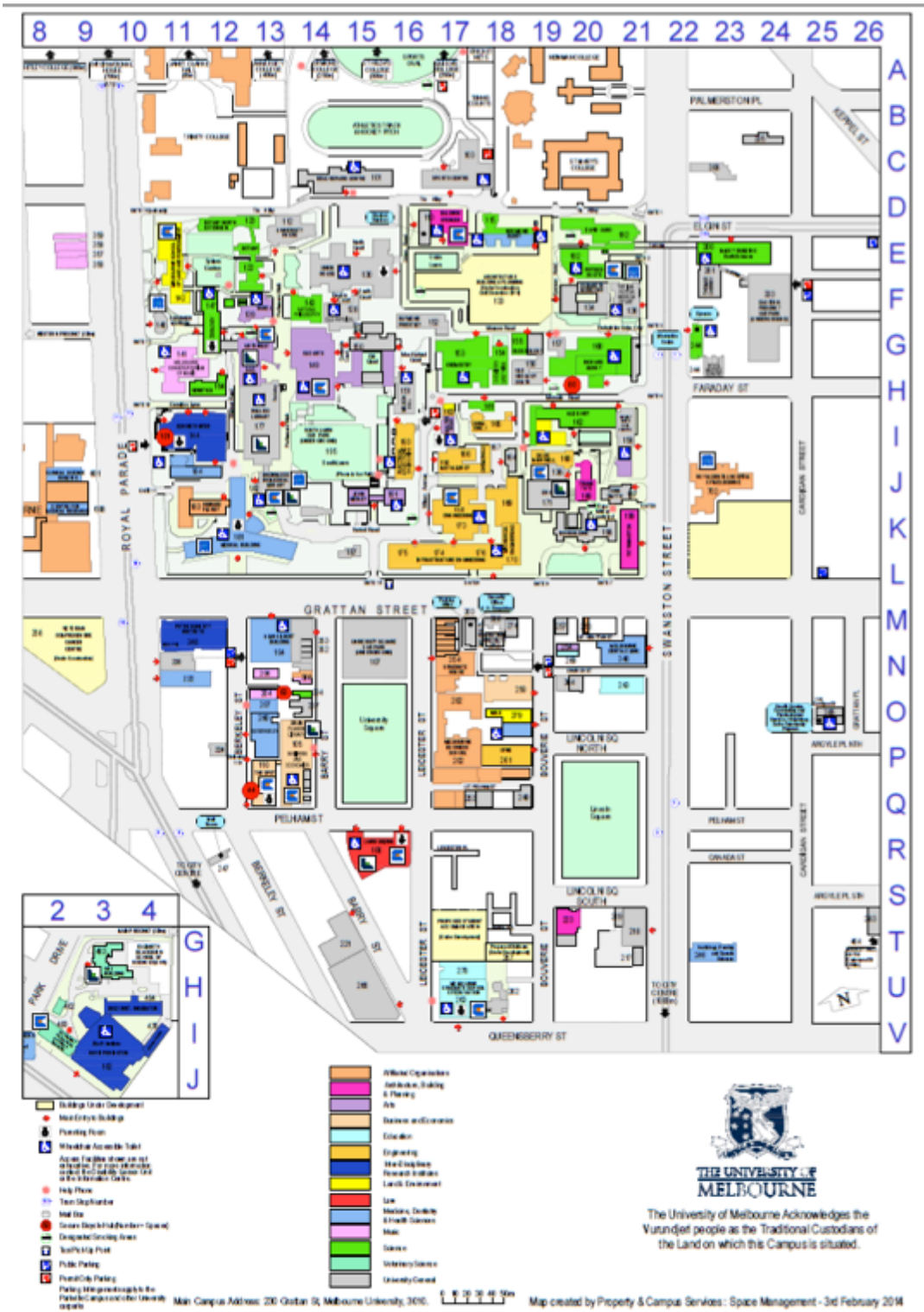
6. 資料



オーストラリア全体とメルボルンの位置



CBD 周辺



メルボルン大学キャンパスマップ